

検断小頭 国光利兵衛の答弁 (中)

吉田紗美子

「ここに」と、取り調べる河合新奉行は白洲に坐らされている利兵衛がよくみえるように、証拠品を掲げてみせた。

「これは、浅見安之丞の手になる獄中記である。その方の今までの申し条、逐一この記述と符合しており、まんざら虚言を申したてているとも思われぬ。

だが、三名の者処刑後、これをただちに中川前奉行に提出せず、河田佳蔵獄中記とともにその方手許に止めおいたは、何故なるや」

「それは、先ほど申しあげましたごとく、中川様へ提出しても焼きすてられるのみと存じ、それなれば、ご遺族にお渡しした方が喜ばれる、と考えた故にございます」

「報酬が目的であったか」

その言葉に、利兵衛はぎょろりと目を剥いた。

「私は自分を、それほど卑しい人間とおもったことは一度もございませぬ」

「……では、なにかの取り引きの材料に使うつもりであったか」

「なにを取り引きするのでございますか」
「遺族へ即刻、遺品とともに渡さず、手許に秘匿しておいたは、正義かあるいは俗論か、時勢の成り行き行き安定をまって歩のよい方へ渡し、おのが立場を良くせんと企んだからであらう」

「それこそ濡れ衣と申すもの、三名の処刑は極秘裡でありましたゆえ公表はならず、したがって遺族に、遺骸はもちろん、遺品の下げ渡しもならず、手許においております内に時機を失した、それだけでございます」

「まあ、よい。それについては追々、明らかにするであろう。」

それはさておき、毒殺謀議の委細を述べよ。毒殺はその方の発案であったか」

利兵衛はそこで坐り直した。

脛に食いこむ砂利の痛さも、頭のすてっぺんを灼く太陽の暑熱も、なにも感じなかった。緊禪一番、これからがこの執拗な疑惑を晴らしてゆくべき正念場だった。思い出せ、どんな些細なことでもすべて甦らせろ、具体的な細部がおのずから真実を語ることは多々あるのだ、と利兵衛は記憶を追った。

三人の処刑の日時は、奇兵隊の進撃とふかく関わっていた。

奇兵隊—というのは、長州藩の正規兵の軍隊ではなく、二年前、外国艦を攘夷する実戦にあたり、正規兵がいかに物の役に立たぬか目前にみて決起した、身分の低い士、百姓、町人、その他あらゆる階層の者の集団であった。藩も、領民皆兵の立ち場からこれに武器をあたえて、軍隊とした。この寄せ集めの軍隊のほうが、正規兵より断然強い。士気の高さがちがうのである。

その奇兵隊が、幕府にひたすら追隨する宗藩の俗論政府に業を煮やして、ついに反乱にたち上った。破竹の勢いで、山口へむけて進軍中だという。おなじ俗論の政府をもつこの徳山に攻めてくるのも、時間の問題となっている。

藩ははじめ、奇兵隊が獄中の同志を奪回にくるのを想定して対策を練ったが、結局、奪回前に囚人を処刑してしまふ、と方針を定めた。そのために、奇兵隊の勢力が盛んになればなるほど、彼らが徳山に近付けば近付くほど、三人の処刑が早まるという皮肉な現状になっている。

「奇兵隊が宗藩の俗論政府を倒すべく、山口にむけて馬関から進軍を開始した……、それにつれて分散していた沿道の奇兵隊も合流している……との風評は、これまでも幾度か伝わっていましたが、年末には、それがいよいよ真実となりました。

毒殺案をはじめて承りましたのは今年の正月八日、それも夜の五ツ半（九時）ごろ。

中川様よりの火急の召し出しにより罷りですと、いつもは縁側に坐って御用を承るのでありますが、その夜は『入れ』と仰せで、入ると『障子を閉めよ』と仰せられました、『今日、お館で、本城清、信田作太夫、浅見安之丞三名の者に対し、毒殺始末の内意があった』と、切り出されました。

毒殺……と、ひどく愕いた私をみて中川様は、『この内意は、ご家老の富山殿より出たものであるが、富山殿の命令はすなわち、殿その人の御命ごよめいと心得よ』と、そのとき申されたのでございます。

殿の御名前に私がおもわず平伏いたしますと、中川様は重ねて、その方、今から牢医 岩津琢磨方へまいり、薬味調合のうえ差しだすように伝えよ、『これは極秘じゃ。よいな』と念を押され、私も深く肯きました。反対することなど思ひもつかず、毒殺ときいて全身に悪寒が走り、しきりに寒くありました」

うそ寒げに火桶を抱えこんで火箸で灰をかきならしていた

中川奉行は、にわかには態度の変った利兵衛をじろじろ眺め、奥へ入ってゆきしな、非常にさりげなく、「相牢の者は出しておけ」といった。

平伏している利兵衛には、手の切れるほど鬘目の立っている袴の裾の部分と真白な足袋しか目に入らない。小柄なこの奉行は、色白で細面、みるからに神経質な顔付きをしていて、瘡を立てると眉間にくつきり、二本の堅皺が刻まれる。小綺麗な身装に似つかわしくないのはその口で、この人は怒ると、下司下郎も閉口して逃げだすほど口汚く罵ってやまない。それが他人の事でも大きく堪えぬ。琢磨の事など、貧乏者の子沢山にはじまってもう虫ケラのごとく軽侮するのに、その琢磨を調味役にえらんだのは、わかたつたような、それでいてよく考えればわからぬような……と、利兵衛は感じた。牢医はもう一人居るのに、なぜ琢磨でなければならぬのか。

夜の闇をあるいていると、横殴りの吹雪がどっと吹きつけてきて、合羽の下に真綿の胴着など着ている役には立たず、舌打ちしたくなるような寒気であった。利兵衛の予想では、しだいに状勢緊迫につれ、いずれ囚人たちは今の浜崎の獄舎から辺鄙な山奥の、仮牢か寺かに移されるであろう、それがもっとも妥当な措置、とおもっていただけに、毒殺は、いかにも手段をえらばずの観がある。

大体、この三人には、どうでもこうでも殺してしまわなければならぬほどの罪があるかどうか、それも利兵衛にはよ

く分からない。

本城清は学館教授で、この五ヶ月近く利兵衛がみてきたところでも、学究肌の人柄であった。(徳山藩の改革を多くの方面にわたって推進したのは、清の弟、江村彦之進であったから、この人は真先に政敵の俗論派の刃にかかって惨殺されている) 捕縛当時、清は代官職にあったが、代官は民政に關して最高の職司とはいえ、清が民衆を煽動して裏工作を企てていたとは考えにくい。

学館教授の浅見安之丞の立場も似たようなもので、政敵は、実質的に彦之進をたすけて改革を推進させた弟の兒玉次郎彦を騒動の朝すぐに殺したが、安之丞は殺さなかった。

信田作太夫にいたっては、単なる武人で、しかも共同謀議の行われた日には出席していなかった。

つまりは三人とも、連類の罪に問われているのであった。考えにふけりながら山陽道の街道筋へ出たとき、いきなり、ぴしりと肩先へ鞭の一振りをくらって利兵衛はよろめいた。背後からとばしてくる早馬の、馬蹄のひびきが聞えなかった。いまは準戦時とあって、徳山の俗論政府は山口の宗藩俗論政府と、日に八度、早馬を往復させて連絡をとりあっているのであった。

海岸には夥しい数の提灯の灯が明滅していた。奇兵隊進撃を阻止するため、浜崎の台場に大砲を備えている。その作業の灯であった。

街道から南は、町方となる。

琢磨宅はそこに近い小沢町の一角にあり、山茶花の生垣が目印だった。いかにも田舎くさい色の赤い花がべたべたとつきすぎるほど咲いているのをすかして、灯が洩れている。

琢磨は在宅していた。

「人払いを」

琢磨の後に顔をならべている子供たちをみながらいうと、琢磨は落ちこんだ目をきよるきよる動かし、「いやな話じゃな」と迷惑げである。利兵衛がその耳に口をよせて短くささやくと、琢磨は両手をはげしく振った。袖にしみついている薬臭さが煽られてあたりにはひろがった。

「この時、琢磨申しますには、

『その儀は医法にて固く禁じられているゆえ、どなたの命令であろうとお受けできません』と、断固、拒絶でありました。風采の揚らぬ凡手としかいいようのない琢磨でも、やはり医者のはしくれ、道理は弁えておる、と感心しましたとき、琢磨つづけて申すには、『毒殺すると、死骸引き渡しの際にたちまち露顕する。そうなれば翌日はもうこの狭い徳山の家の中はその噂でもちきり、誰がやったのだらうと、額を集めて臆測を交わす。

よいかな、小頭どの。

殺人にあたって重要なのは、誰が命令したか、ではなく、つねに問われるのは、誰が下手人か、それだけなのじゃ」と、

本心をぶちまけました。

つまりお受けせぬのは我が身可愛さから、そのみなのじやなと申しますと、痛い所を衝かれた琢磨はひどく不機嫌となり、かるがるしくこんな難題をひきうけてきた私がわるい、と申し、

『いったいこれは、殿の御命ごめいというが、いかに寵臣の富山殿の言上ごんじょうとはいえ、まさか毒殺を、よきに計らえ、とは殿も仰せにはなるまいから、富山殿は殿を欺いてお許しを得たのであろう。さらに申せば、殿はいま、宗藩の家老であった福原越後えちごどの——つまり、兄君が、蛤御門の上洛軍の責任者の一人として詰め腹切らされ、幕府軍の尾張征討総督にその首をさしだしたばかりのお悲しみの最中ゆえ、富山殿は煩わしいことは殿のお耳に入れまいとしたかもしれぬ。

もう一つ申せば、この命令は中川御奉行の一存かもしれぬ。あのお人は奸佞な人柄ゆえ、油断しておればたちまち畏にはめられるぞ』

そんなこともわからぬかと琢磨したり顔で申しますゆえ、私も肚を立て、すこしく口論して、それから外へ出ました。中川様お邸まで戻り、琢磨お断りを復命いたしました、案に相違してなんのお返事もありません。

その気配から、三名の処遇はまだ御家老たちの同意が得られていない段階……と直感いたし、琢磨奴の申すのとは違つた意味で、この命令を殿の御命などと信じて実行すれば大変

なことになるところだった、と、ほっといたしました。

毒殺は怖るべき手段であります。これが一頓座しましたことは、まことに幸いでありました」

中川邸を出たのがかれこれ夜中の子の刻（十二時）すぎ、その夜は利兵衛は浜崎の詰所で夜明かしをした。

この夜、番所には正式に増番のお達しがあり、これまで昼間は囚人一名につき番士は五名、夜間は九名であったものが、これからは囚人一名につき十二名の看視がつくようになった。状勢緊迫をひしひしと感じる。炉端に集まっている番士たちの話題も奇兵隊の動静ばかりである。

「また、この夜、同役脇田文左衛門どの、番士たちに詰所の羽目板に立てかけてある手槍を示し、『奇兵隊来襲の節は、防ぐにはおよばぬ。なにより先に、あの槍で囚人たちを突き殺せ』と命令いたしました。その命令がどの筋から出たものかは存じませぬ。

ともあれ、囚人たちの命はもはや風前の灯火そのものでありました」

番士にゆり起された。中川様より火急の召し出しということであった。戸外はまだ真暗で積雪深く、雪はふみしめるたび足の下でふるると鳴った。

「御用の趣は、なんと少しでも琢磨を承服させよ、との厳命でありました。

お奉行様このとき袴着用なされており、この夜更けに今から登城かと錯覚いたしました。が、すぐに、その逆、奉行は深夜の評定から帰邸されたばかりと気がきました。おそらくその評定で、囚人毒殺に関して四人の御家老様の意見一致をみたのだ、と推察されました。

私は頭をあげて初めて逆らったであります、もう決死の覚悟で、恐れながら、昨夜の復命のごとく琢磨の心固く、あの様子ではとうていお受けいたしませんゆえ、なにとぞ別の手段をお計らいくださいませ。ぜひに琢磨を、とのご意向ならば、私にはもはや琢磨を説得いたせませんので、別人にお命じくださるよう、と、終りごろには自分でも声の震えているのがわかっておりました。

はたして中川様たちまち顔面蒼白、眉間に堅皺をきざみ、口をゆがめて、ならん、ならん、『お断りは絶対にならぬぞ』と扇子を私に投げつけてのご立腹で、それから、琢磨を承服させる才覚もそちにはないのか、うすら馬鹿、阿呆、穀潰し、禄盗人、その頭と前にぶらさげている物はただの飾りか、と悪口雑言のかぎりでありまして、『いつまでそこに坐っている、蹴り出さねば琢磨のもとへゆけぬのか』と申されました。中川様がかほど相手を罵倒されるときは底意があつて、どうでもこうでも鈍感な相手を意のままに動かしたいからで、

つまりは中川様は私にまだわからぬかと悪口をもって催促なされているのであります。

ハッと気付きました、琢磨には診断^{みだて}違いで囚人を死なせた前歴があります、その件は不問に付されたまま過ぎてきましたが、中川様はそれで琢磨を脅せと、ご自分の口からは言えないことを私にせよと申されているのであります。

あのことでございましたか、と利兵衛の目が問い、奉行の目が、そうじゃと答えた。

暗黙の了解とはこういうことであつたか、と利兵衛はその一瞬を何度もおもいだしながら、わが家へむかっていた。

琢磨は生け贄であつた。

琢磨は遠からず毒を調薬する。

せねばお役御免となつて城下追放、したつたでその罪により城下追放、将来どの他国へゆこうと毒を盛つた過去がいつかひそひそと洩れだし、医では身を立てられぬ仕儀とならう。

そして、自分も。

自分も遠からず番士に毒薬の包みを手渡すだろう。

奉行の命令はご家老の命令、ご家老の命はすなわち殿ご一人の御命^{ごみち}である、と聞けば、親代々「忠義」のしみついた自分の体はとびあがつて平伏し、金縛り^{かなしばり}になつて拒否することなど言うもおろか、藩の刑罰の歴史はじまつて以来の、毒殺始末なんぞという非道を自分は犯すであらう。

利兵衛はあたりを見廻した。まだ鶏鳴もなく空は黒い。暁前の暗さがたちこめていいる。

かつて正義派の人びと―江村彦之進や兒玉次郎彦は、藩政改革を唱つて、賄賂の悪習を断ち、身分の高下なく能力ある者を登用する―人材登用の道をひらいた。利兵衛もこれから良い世の中になるような期待をもつたものであつた。

それが昨年夏、俗論派が政権を奪い返すと徳山はたちまち以前の腐敗した徳山にもどつてしまつた、藩の要職を占めるのはすべて富山殿の縁辺の人びとであり、猟官は金次第（おそらく中川奉行もその一人）、能力も信念もない大身の子弟が上席に坐つている、以前は当然とおもつていたこの光景を、今では誰しも、こんなことで幕府の長州征伐軍を迎えて危機をのりきれるか、と危惧している。その、こんなことではならぬという自覚だけが、正義派の人びとが残してくれた遺産なのであらう。

ここ十年、徳山は富山殿の一言で動いてきた。人は争つて富山殿に賄賂を贈り、利を得ようとした。

なぜ富山殿にそれほど権力ができたかという点、富山殿は、殿のご寵愛だならぬ「お国御前^{くにごぜん}」をさしだしたからであつた。「お国御前」というのは、江戸邸に常住して国許へ帰らない正室に対し、国許にいる側室のことで、家中では「お方様^{かた}」と呼ぶ。

お方様は毎年、雛の節句に家中の娘をえらんでお館に招か

れる。去年招かれた、竹藪をへだてた裏の二見ふたみどのの娘御は、奥向きのあでやかな雰囲気につきかり上気して酔ったようになっていたが、お出ましになったお方様を一目見るなり、魂を抜かれてしまった。そのお美しいことといったら……、そのうえお方様は高貴な家柄の出でないだけに気立ておよろしく、愛嬌もおありになる。老女が一人一人娘たちの名を告げるとに、お方様は玉虫色の紅を塗った唇をはころばされて、にっこりとお会釈を賜る。お館を退ってきた二見どのの娘御はただもう夢現のていで、何をたずねられても「それはほんに、お綺麗なお方じゃった」とそれだけを繰返すばかり、頂戴してきた定紋入りの菓子手文庫に大事にしまつて、徹が生えても食べなかつた、ということであつた。

このお方様が殿へそつと耳打ちなされて、富山殿は一代家老になつた、という噂もきいている。

しかし、問題は、殿が他の三人の永代家老の言よりも、この成り上り者の富山殿の言葉によりよく耳を傾けられることで、正義派の人びとにとつて富山殿は、早晚、除かなければならぬ君側の奸であつた。

だが、富山殿を刺しにいった河田佳蔵や井上唯一には、侍らしい死が与えられたというのに、いま牢に繋がれている本城、浅見、信田の三人は一回の取り調べもうけず、奇兵隊来襲のどさくさに紛れて毒殺されようとしている、いや、自分が毒殺しようとしているのである。いったい、自分はどうか

ればよいのか、なにか手段はないのか、と、利兵衛は睡眠不足の重い臉をあげて空をみあげたが、空にはまだ黎明の気配もなかつた。

我が家の井戸端では、早起きの母親がもう車井戸の滑車を鳴らして漬物用の白菜を洗っていた。積みあげられた白菜の束はきしきしと新鮮な音をたてている。

「昨夜は泊りじゃつたか。ご苦労でありました」

母親の犢いに利兵衛の心はわずかに和んだ。裏の竹藪では、雪を弾いてしきりに雀が飛び交っている。姉がもう機屋に入つたのであろう。竹藪は本来、防火の目的で各邸に付属しているのだが、食用にも燃料にも生活用具にもおよそ日用のあらゆる役に立ち、こんなに小暗おくらい時刻から内職する機音をも吸いこんで消してくれる。

縁遠かつた姉はその原因である不自由な足を巧みに操つて、一日に白木綿一反(十一米)を織りあげる。それを問屋にもつてゆくと、手間賃の棉をくれる。三反の白木綿を織れば一反に相当する棉をくれる。それを糸に紡いで、染めて、織つて、利兵衛の家族の衣料はみな、姉きよの働きによつて賄われているのであつた。

家の中では、子供たちはまだぐっすり眠っていた。ささのは、と目で探すと、大柄で色の白い、おっとりした性格のささのが、珍しく居間の箆笥の前で風呂敷をひろげて荷作りに熱中している。

「なにをしておるのじゃ」

と問うと、ささのは顔もあげず、

「どうしたもこうしたも、ありませぬ。昨夜、裏の二見さまの奥様が、奇兵隊が攻めてきて戦になったらどこへ逃げましょうぞ、とご相談にみました。そのすぐあとのお館からのおふれでは、戦になればお館の裏山へ避難するよう、とのことでありました。とすれば、着替えや米や、家族分の避難のための荷作りをしておかねばなりません」

と、利兵衛の屈託には気付きもしない。夫婦というものは、いつもこのように、片方に相談事があるときは、片方が忙しくて聞く耳もたないのである。

飯はまだか、ときくと、ささのは、あと、あと、と邪険にいいすて、

「今から飯などと言われても……おお、そうじゃ、短刀も用意しておかねば」

「そんなものをどうするのじゃ」

「しれたことではありませぬか。奇兵隊が私ども女子を犯しにきたら、その時は娘ともども潔くのどを突いて死ぬ覚悟であります、と二見様は申されました。私も後れをとるようなことがあっては末代まで国光家の恥、かなわぬまでも手向いして死にまする」

利兵衛は仰天して、ほ、といったか、まさか、といったか覚えがなく、ただまじまじと豊かなささのの髻のあたりを眺

めて唸った。

「そちを……犯しにのう……」

「なにも不思議ではないこと、大昔から負けた国の女子はみな犯されると決ったものでありましょう。それに奇兵隊というのは聞くところによるとなんでも、食いつめ者や無法者の寄せ集めの軍隊と申します、この城下に入ってきたら、まず第一にすることは、掠奪に暴行でありましょう」

思いこみの烈いささのの口吻には、明日にも迫ってくるかもしれない非常事態を恐れながらも、どこかで胸ときめかして待ちのぞんでいるような気配もある。

これではとうてい飯にはありつけぬ、と見限りをつけた利兵衛はまた外へ出た。行った先は、港に近い、船頭や沖仲仕、人足相手の一膳飯屋や小料理屋が店を連ねている一画である。ここも戦間近を控えて賑い、にわかに店の数もふえている。

質素第一の家中では小銭を出して飯を食うなど、とんでもない話であるから、この界限で見知った顔に会う心配はまず、ない。それに第一、まさかここまで奉行の「火急の使い」が探しあててくることはない。

利兵衛は小料理屋の二階の座敷に通った。十二、三の小女がすぐ炭があかく燃えている火桶を運んできた。それからまたすぐ、熱い番茶と朝食の膳を運んできた。

食べて人心地がつくと欠伸が出た。

「すこしの間、休むからな」

利兵衛が声をかけると、それをきくなり小女はつつつと畳を歩いて、隣室から男用と女用の枕二つをさげて来、突っ立ったまま、

「どねえ、なんがええかね。肥ったのか細いのか、年増か娘か床上手か、どれでも好きなのを呼んでくるよ」といった。

度肝をぬかれた利兵衛は、かぼそい胴に赤前垂れをしめ、栄養の悪い赤茶けた髪をひつつめにした少女を、まじまじと見上げた。環境は人を造るといふが、こういう界限にあってはこの幼さで女郎買いの手配に長ける、いづれ親兄弟もないのであろう、哀れなことじゃ、と利兵衛は枕をあてがいながら、「いやいや、わしは女はいらんのじゃ。ただ眠たいだけだのう」

そういつて横になった。

琢磨方へゆかねばならぬ……、それが胸につかえている。しかし障子の破れ目からみえるのは、青一色の眩しい雪晴れの空である。毒薬調剤の密談にはいかにも不似合いな朝、琢磨方へ赴くのは物皆の輪廓が溶けてゆく薄暮のころ、提灯の火が風にゆらぐと人の顔の目鼻立ちがのっぺらぼうにみえる逢魔カ刻……そんな刻限でない、とてもとても……、そうおもいつつ利兵衛の口からはもう酈が洩れていた。

「これから申しあげますことは、脇道じゃと思し召しかもしれませぬが、そこをまげてお聞き届けいただきたくぞんじます。

その日、仮眠して昼前に浜崎詰所へ着きますと、早速に番士たちの訴えがありました。これまで早う牢から出せと喚きつづけて暴れていた肝焼き(世話やかせ)が、今度はどうでも牢から出てゆかねと暴れている、と、これは本城清どのと相牢の、百姓手伝い庄助なる若者のことであります。

この庄助の突然の放免は、かの三名の囚人の謀殺決行時に、部外者が牢内においては秘密漏洩のおそれもあり、との中川様のご意向によるものでありまして、すでに庄助以外の相牢者はことごとく出牢させておりましたので、残るは庄助のみ、でありました。

庄助の言い分と申すのは、『おれは本城様と一緒にのうては出てゆかん。』ということ、『本城様とお前とでは罪の重さが違うから、一緒にの出牢はどうてい無理な相談じゃ』と言うてきかせましたるところ、『ほんなら今からお前を半殺しにするからおれの罪を重くしてくれ』と、かよう訳のわからぬことを申します。

明らかに、このふてくされの若者が変貌しましたのは本城様の感化に他なりません、ふしぎなことに、常日頃、本城様がこの庄助に何かを訓戒するような素振りをお見せになっ

たことはなく、一番牢から聞えてくるのは庄助の声ばかりで、本城様のお声は聞えませぬ。そのため、牢内見廻りの折は、本当にお出でかと牢の奥を窺ってみるほどでありました」

この庄助の罪は、盗伐であった。

たかが薪用にする枯枝を背負い籠一杯分集めて廻ったことで本牢入りとは、いかにも苛酷な処分であった。

だが、盗伐した場所が問題であった。

通称、マンニャク山。つまり、万役山。

ここは宗藩領と徳山領が境を接している。

地面に線引きしてあるわけではなく、巾十間ほどの境界なので、宗藩領の百姓も徳山領の百姓も薪集めしているうち、しらずに越境していることがある。

庄助がせつせと松の枝を集めていると、奇声を発して山役人が走って来、すでに血相の変った役人は、「何をするかっ」と鞭をふるって庄助を撲り倒した。庄助の衣服が破れ、皮膚まで裂ける有様である。

そのうち見張小屋から数人が走ってくると有無をいわさず縛りあげ、「松の枝を盗んだな」というから正直に、「ちよっとだけ貰うた」といったところ、殴る蹴るの暴行の末、ご城下まで引たてられていきなり本牢へぶちこまれてしまった。まるで重罪人扱いのこの仕打に文句をいうと、胸に手をあてて考えてみい、といって三倍もどやしつけられた。庄助もそうなれば意地で、殺したいなら殺せと悪態は吐くわ、番士に

殴りかかるわ、全くのところ本城清と相牢になるまでの庄助は、どうしてくれようかと利兵衛たちが怒り狂うほどのもてあまし者であった。

庄助にはこの捕縛の成行きがどうにも解せないであった。清が入ってくると早速、自分の無実を訴え「お前様もそうおもうじゃろう」とたずねた。清は、髪も梳らぬ野獣のような庄助をじっとみつめた。

「そなた、親から何もきかされなんだか」

「親は早うに死んだけえ、なあんも聞いちやらん」

「では、これまで、苦労が多かったのう」

「いや、そねえな事はどうでもええ。それよりおれがなしてこねえなひどい仕打を受けちよるか、お前様にはわけがわかるか」

「……それは、わかる」

「おお、そんならすぐ教えてくれえ」

詰め寄られた清はしばらく黙っていて、それを言うとき涙が零れてくるゆえ、と一言いった。そしてずっとのち、秋も深くなつてからの静かな夜、「そなたが松の枝を盗ったあの山には、怒りの黒い影を宿した木立もあれば、涙の谷もある。徳山の者は誰も涙なくしてあの山を見る事ができぬ。そなたが言語同断の仕打をうけたのは、今を遡る百五十年前この徳山が改易になった、そのときの悲しみを思いださせるきっかけを作ったからに他ならぬ」と、庄助に話してきかせた。

百五十年前のそのころ。

万役山の境界線では、宗藩領の百姓と徳山領の百姓とがたがいに越境、盗伐をくりかえしていたが、どちらかというところ宗藩領の百姓が朝夕立てる煙はすべて徳山領の薪だといわれていた。しかも宗藩領の百姓はそれを悪事とみとめず、徳山領の百姓が咎めると、なにをいっても聞く耳もたない。宗藩領の者となれば百姓まで支藩の百姓を見下げるのであった。

たまたまその日、徳山領の百姓二人が宗藩領の百姓二人の盗伐している現場に行きあわせたことから、問題は一気に燃え上った。

烈しい口論の末、たまりかねた徳山領の百姓が宗藩領の一人に打ちかかった、すると、宗藩領のもう一人が持っていた鎌をふりまわして徳山領の百姓の首を落してしまったのである。

徳山藩は宗藩に下手人の引き渡しを要求したが、宗藩は頑として応ぜず、第一、マンニャク山なる山など聞いたこともない、との回答であった。たしかに、宗藩領では同じ山でも呼び名が違うのである。しかし、この姑息な理由にはありありと、分家の分際で本家にむかってなにを言うか、が、見えただ。

時の徳山侯は名君であった。また剛毅な性格で、理非曲直を曖昧にしない。それに、宗藩主といったところで支藩から出て本家に納まった人にすぎない、との感情もあったかもし

れない、この殺人事件の非はどうみても宗藩側にあったから、要求をゆずらぬこと半年におよんだ。

これを甚だ不快にももった宗藩主は、あろうことか、身内も同然の徳山侯を「本家に礼を失した」理由で隠居処分にしてくれるよう幕府へ願い出た。宗藩では、ただ、隠居を願い出ただけ、とのちのちまで言い張った。しかし、幕府がこの願いを受理したとき、徳山を待っていたのは、「取り潰し」の処分であった。

徳山の家中の者は、「取り潰し」とは文字通り「潰す」のじゃな、と身にしてみてもその日のむごい光景を見た、殿が青細引ほそびきで括った駕籠で供の一人もなく受け入れ先の奥州の藩に送られてゆき、家中の者すべて邸から立ちのいたあと、宗藩から百をこす人数がやってきて家は掛矢を打ちこみ叩きこわし、屋根は縄かけて引き倒し、あっという間に瓦礫の野に化してしまった。名木や名石はすべて宗藩に運ばれ、山陽道をゆく旅人の目をたのしませた数百本の桜並木は伐られて、上方かたで売り払われた。

「本家に礼を失する」と、どれほど苛酷な報復が待っているか、徳山は身を以て知った。

徳山は独立した藩であって、しかも宗家の一支藩にすぎぬ。

徳山は宗藩の臣下ではないが、しかも随順すること白を黒といいくるめなければ宗藩の影の下で生きてはゆけぬ。

その他まだまだ多くのことを徳山はこの改易処分ですんだ

のだった。

「徳山は四年後に再興成ったのだが、同時にそれ以後長く宗藩の目付家老が二家おかれて徳山を看視することになった。徳山の動きは細大もらさず宗藩へ報告された。

そんな思うだに悲しい歴史の発端となったのが、そなたが薪集めしたあの山なのじゃ。盗伐はもとより罪ではあるが、あの山で枝一本伐ることは、せつかく出来た宗支のかさぶたを引き剥がし、また血が滲んでくること、ゆえに徳山の者はあの境界線へは足をふみ入れぬ」

あの改易以来、徳山は生きてゆくために宗藩の目色顔色を窺いつつ宗藩に追隨するしかない、哀れな藩に成り下った……、庄助に話してきかせる清の口調にはその苦渋が滲んでいたが、もとより庄助がそれを解するわけはなかった。

「で、その庄助であります、本城様のお世話をするから牢は出てゆかん、というので詰所ではほとほと困り果てました。

そこで、かような成りゆきは牢始まって以来の椿事でありますが、本城様に庄助を説得していただくことにしました。すると本城様は、庄助にお使いを頼んでもよいかと私に問われます。庄助を立ち退かせるためなら、どんな難題でも引きうける位の意気込みでありましたから、私におきましても一も二もありませぬ。

本城様は庄助に一通の手紙を託して、『これをわが邸に。

なお、困った時はいつでも邸に相談にゆくがよい』と仰せでした。『ほいでも、お前様は牢の中ではないか』と庄助が申しますと、本城様は『息子がおる。よく出来た息子ゆえ、そなたの身の振り方もよくみるであろう』と、いわれます。『そりゃ、安心じゃ、して、その息子というのはいくつかね』と、庄助が問いますと、本城様は『十二歳に相成る』といわれ、自分でもおかしかったのか、おっとりとした微笑なされました。

すると……、寒風吹きぬけるたび、床の一角にある便槽から強烈な小便の臭いが漂ってくるこの牢内が、本城様の周囲だけにわかにかに春風駘蕩の春景色の趣と化すではありませんか。こんな本城様の人柄に惹かれて人が集まり、しぜんその派の頭領に担がれてゆくのだなと私は納得し、また、それ故に、本城様を殺しておかねば俗論派の安泰はない、という中川奉行のお考えもしっかり理解できたのでございます。

もちろん、本城様が庄助にもたせた手紙は役儀ゆえ検めました。

処刑後、牢内に本城様の遺書がなく、けれどもその遺書の文面が易しく、簡潔で、慈愛あふれるものだと私が知っておりますのは、申しあげましたような次第によるものであります」

(続く)